

# セツルメントハウスにおける共同キッチンの史的研究

## — その1 ハル・ハウスのコーヒーハウスに着目して —

井口 力哉・須崎 文代・印牧 岳彦

**背景と目的** セツルメント運動とは、資本主義や社会階層の矛盾が生み出す貧困に対して、宗教家や学生が都市の貧困地区に自ら居住して宿泊所、託児所、教育、医療などを相互扶助の精神にもとづいて実践した活動である。世界初のセツルメントハウスとしては1884年に設立されたロンドンのトインビーホール<sup>1)</sup>が知られ、ジェーン・アダムス<sup>2)</sup>とエレン・ゲイツ・スターがトインビーホールの影響を受けて設立されたハル・ハウス(1889年、シカゴ)も、こうした慈善事業を目的とした施設のひとつである。また、ハル・ハウスはその規模や事業内容から数あるセツルメントの中でも最も有力なものであったことが知られている。本論では、ハル・ハウス内のさまざまな施設の中で、居住者と労働者の食生活の改善を目的とした施設であった共同キッチンと、その提供場所でありハル・ハウスと外部とを繋ぐ接点としての役割を担っていたコーヒーハウスに着目し、その変遷や使用方法を明らかにすることを目的とする。

**既往研究と本研究の位置づけ** ハル・ハウスに関する主要な論文には木原活信『J. アダムスの社会福祉実践思想の研究』<sup>3)</sup>等の社会的な観点での論文とGuy Szuberla(1977)<sup>4)</sup>等による建築学的観点からハル・ハウスの概要を論じたものがあるが、本研究は同館の活動において重要と考えられる特定の施設に焦点を当てることでそれがセツルメント運動のなかで具体的に果たした役割を検討する。

**方法と対象** イリノイ大学に保管されているハル・ハウスアーカイブとシカゴ美術館のアーカイブの文献調査によって収集したハル・ハウス設立前から1960年代までの資料を分析対象とする。

**ハル・ハウスの概略** 1888年、J. アダムスは自らの社会運動に関する手掛かりを求めるなかでセツルメントハウス設立を決意し、ロンドンのトインビーホールを訪れた。翌1889年9月18日、チャールズ・J. ハルの元邸宅(1856年建設)にJ. アダムス、E. G. スターは家政婦のメアリー・ケーザーと共に移り住み、この施設を元家主の名を冠してハル・ハウスと名付けた。当初、ハル・ハウスの所有者であったヘレン・カルバーは3階建ての内、1・2階をJ. アダムスらに貸し出していたが、後に無償ですべての部屋を貸し出し、セツルメント事業のための土地の提供も行った。その後、この土地には計13棟もの施設が建つこととなるが、そのすべてをアーヴィング・K. ポンドとアレン・B. ポンドのポンド・アンド・ポンド設計事務所が設計している。ポンド兄弟は建築家でありながら慈善家としての側面も持ち合わせており、ハル・ハウスのセツルメント事業へも積極的に関わり、入居を検討していた時期も存在する。

**最初のコーヒーハウス** 1893年、2階建ての施設(1F キッチン、コーヒーハウス、2F 体育館)がポンドにより新たに建設された。1階のキッチンとコーヒーハウスは、健康的な食生活にまで気を遣えないような労働環境下にいた近隣の縫製工場の女性労働者のための施設<sup>5)</sup>

として開かれ、調理済みで保存のできる食事が低価格で提供した。キッチンも、同時期のシカゴ万博にて展示された救貧のためのニューイングランド・キッチン<sup>6)</sup>を参考に、科学実験室のような設えでつくられた。しかし、科学的調理を施した食事は特に男性には人気が無かったという<sup>6)</sup>。このように食生活改善への理解が少なかった一方で、コーヒーハウスは2階の体育館と共に娯楽施設として知名度を急速に上げていった<sup>7)</sup>。一般の利用客をはじめ、学生団体や専門家団体、シカゴ倫理協会などの会合のためにも利用された。体育館ではダンスクラブなどが開かれ、クラブ後の食事のためにも利用された。

**新たなコーヒーハウス** コーヒーハウスはその後施設内の様々な場所へ移転を繰り返したが、1907年時点の図面に表記されているコーヒーハウスはGuy (1977)によれば1899年に建設された事が確認できる。新たなコーヒーハウスは地階を含む3階建ての一階に組み込まれ、コーヒーハウスと共同キッチン、居住者のためのダイニングルームは互いに隣接していた。この時点でのコーヒーハウスはブリックワークや木の梁を剥き出しにすることによる装飾表現が特徴的で、同時期に作られた居住者のためのダイニングルームにもこうした特徴が見られる。『HULL-HOUSE YEAR BOOK 1906-1907』<sup>8)</sup>によれば、ハル・ハウスには毎週約9000人の訪問者がいたとされているが、コーヒーハウスの利用方法から多くの訪問者の受け口のひとつとして機能していたことが推察できる。

**考察と展望** コーヒーハウスは「まちの酒場にかわる場所」として設立されたが、これは貧民街での食生活改善を目的とするものであり、提供されるのはノンアルコールの飲料と健康的な食事と交流の機会であった。こうした食生活の改善を目的とした事業はなかなか理解されなかったものの、コーヒーハウスと体育館の存在が知れ渡ったことで、のちにJ.アダムスらのセツルメント運動や食生活改善が影響力をもつ機会のひとつとなった可能性も考えられる。ハル・ハウス以外のセツルメントハウスでも同様のダイニングホールやカフェが計画されており、それらとの類似性や影響について検討を進める予定である。

**註** 1) 建築家Elijah Hoole設計。2) アメリカの社会事業家。1931年にノーベル平和賞を受賞。3) 第3章 慈善事業から博愛事業への変遷過程 pp.97-110。 4) Guy Szuberla. Three Chicago Settlement : Their Architectural From and Social Meaning, University of Illinois Press, 1977。 5) Hull House Year Book, January 1, 1913, pp. 46-47。 6) 註5)に同じ。7) ジェーン・アダムス著、柴田善守訳(1969)『ハル・ハウスの20年—アメリカにおけるスラム活動の記録—』岩崎学術出版社 p.98。 8) Hull-House Collection, box 43, folder 434。

**参考資料** 1. ジェーン・アダムス著、柴田善守訳(1969)『ハル・ハウスの20年—アメリカにおけるスラム活動の記録—』岩崎学術出版社 2. Allen Freeman Davis, Mary Lynn McCree Bryan. 100 Years at Hull-House, Indiana University Press, 1990。 3. ドロレス・ハイデン著、野口美智子・藤原典子 他訳(1985)『家事大革命：アメリカの住宅、近隣、都市におけるフェミニスト・デザインの歴史』勁草書房 4. 大林宗嗣著(1926)『セツルメントの研究』同人社書店 5. デザイン史フォーラム編(2004)『アーツ・アンド・クラフツと日本』株式会社 思文閣出版 6. 木原活信著(1998)『J.アダムスの社会福祉実践思想の研究』有限会社 川島書店 7. 徳永寅雄著(1968)「セツルメントの変遷とハル・ハウス」『日本社会事業大学研究紀要：社会事業の諸問題』pp.106-120。 日本社会事業大学